

キリスト教におけるインクルージョン研究

－ルカ神学における障害理解－

すず き ふみ はる
鈴 木 文 治

〈要 旨〉

聖書には多くの障害者や病人が登場する。旧約時代また新約時代には、障害がどのように考えられ、また障害者がどのように位置づけられたかが様々に記載されている。特に、イエス・キリストによる障害や病人の癒やしの物語は、福音書や使徒言行録に多く記載されている。様々な障害や病気のある人たちがイエスの身近に存在し、彼らを癒やし、救いに入れた記事は、福音書全体で多くの分量を占め、イエスの宣教と並んで、福音の中心的な使信となっている。この物語をどのように理解すべきか。キリスト教史の中でもその使信の解釈を巡って、様々な角度から検討されてきた。

私は、障害や病気の癒やしという奇跡物語そのものよりも、イエスの間近に多くの障害者や病人がいたということ、否、イエスはそのような人たちの間にいつもいたという事柄を重視して、イエスにおけるインクルージョンの問題を、ルカ神学を中心に取り上げてみたい。

ルカは医師であり、ギリシャ人であったことが知られているが、医師としての立場から見る障害者や病人は、単に事実の把握ということに留まらず、共感的・受容的に描かれている。また、ギリシャ人という出自は、ユダヤ人の多い初代キリスト教会にあって、選民思想の強い集団の中で異彩を放っている。福音のグローバリズムや、また排除される側の視点を絶えず持ち、インクルージョンの理念を持っていた人物である。

このようなルカの神学における「インクルージョン」思想を明らかにすることが、本論の趣旨である。それは、福音書や使徒言行録に示されている「排除されている人たち」を本質的には教会の宣教の対象としてこなかった現代のキリスト教会のあり方への批判、そして今後の方向性への示唆になると思われるからである。

〈キーワード〉

神義論, インクルージョン, ルカの神学, 癒やしの奇跡, 共同体への回帰

I. はじめに

〈神義論における障害の意味〉

古来、神の絶対性、神の摂理とこの世における悪の存在の問題は、神義論という名称で呼ばれ、多くの神学者・哲学者によって様々に論述され説明されて来た。即ち、神が世界を創造し、正にそのことを善きこととなしたもうた事柄(創世記1章4,10,12,18,21,25,31節)と、そのような神の御業であるこの被造物の世界に、何故悪なるものが存在するのか、という神義論の問題は、大別するならば、神の絶対性を是認しないことによるのみ、悪の存在を説明しようという方向と、むしろ神の絶対性なるが故に、この世の悪は存在せず、むしろ悪が存在するかの如く認識する我々人間の側に根本的な問題があると解明する方向という、二つの方向の間で揺れ動いてきた。

ここで言う「悪」とは、震災や事故、戦争や紛争、貧困や飢餓、病気や別離等、人間の個人的な努力では回避不可能で、解決困難な事象である。

では、神義論では、障害はどのように位置づけられるのか。一般的な問題としての「悪」を神学的・哲学的に論ずるのは容易ではない。科学的合理主義的な思考に基本を置く現代社会では、実証的な「悪」を神学的・哲学的に解明することは困難である。ただし、論議の主題や研究主題にすることは、それほど難しくはない。神義論については、教父時代から、今日に至るまで神学者や哲学者にとって中心主題の一つであったからである。

だが、障害の問題を神義論の概念の中に位置づけることは、それほど容易なことではない。それは、生きている現実の人々の存在に対して、神の義の意味を問うことになるからである。

そもそも「障害は悪か」の問いは、神義論によって解決されるものであるのだろうか。障害が悪であるとするならば、神はなぜ障害を作られたのか。それは神によるものではないという見解を取れば、障害の故に苦しむことをどう理解するのか。むしろ、神義論の範疇に入れること自体不可能なことではないのか。障害の理解は、長いキリスト教の歴史の中でも定まったものではない。障害者に「天使」のラベルを貼るところもあれば、「悪魔」のレッテルを貼るところもある。障害を「悪」と捉えることは、その背景に何があるのか。

キリスト教の教義では障害を神の摂理でどのように理解するのかと明確に記されたものや研究はほとんどない。全能で愛の神が作った世界に、なぜ悪と呼ばれるものがあるのかをテーマにする神義論の中で、障害も戦争や病気、飢餓、貧困という悪の一部として扱われるのが通常である。障害は、「悪」という一般的理解が前提にある。

かつて障害の意味を問う神学論議があり、本として出版されている。(注①)だが、そこでの結論は、すべてのものを良しとして創造された神にとって、能力においては不平等はあっても、人の存在そのものは等しく良きものである、ということであった。つまり障害があろうとなかろうと、人の存在そのものは神の良き御業であるという。だが、考えてみれば、人の存在とは能力を含めて「丸ごと人間」の存在である。存在と能力を切り離すことに対して、現在の間人観や哲学がそのような

二元論を肯定するだろうか。この結論は、自らの障害に苦しむ人にとっては、ここに生きていることを神の恵みとして受け止めるべきであり、障害やそこから生ずる種々の困難は大きな意味を持たないと言っていることになる。それは、結局は何も言っていないのと同じことになる。むしろ生きる上でできないことや欠けていることは問わないとすれば、その苦しみの意義をどこに求めることができるのか。

〈障害は神の恵みか〉

2010年2月に行われた「障害は神の恵み」シンポジウムの中で行われた「障害は神の恵み」論争は、障害者に関わっている牧師や神父、また障害当事者が、それぞれの立場から「障害は神の恵みか、否か」を論じたものである。障害によって神に出会うことのできたと証言する人や、障害に苦しむ隣人を介護してきた経験から、「障害は神の恵みとは決して言えない」と主張する立場など、様々な意見が出された。

ただ、このようなシンポジウムに参加している人たちは、神学問題として障害を論じているため、現在の障害観やそこに至る様々な経緯をよく分からない人たちである。障害観の変遷がいかにしてどのような背景のもとに行われたかを把握していない。議論は絶えず神学に、特に神義論に引き戻されるため、当事者や介護者の主観に陥ったものとなった。

障害の専門家の立場から見れば、この論争の一番の問題点は、そもそもこの論争の前提として障害を、障害者個人の属性とする障害観にもとづく考え方に立っていることである。それは、今日では「医学モデル」として知られる障害観であり、何かの機能に障害があり、そのためにできないことがあり、社会生活の中で不利益が生ずるといふ個人を基点とした障害観であって、障害を否定的、あってはならないものとして見ることになる障害観である。

むしろ障害を個人の問題でなく、社会の中で問うことによって、その意味も対応も大きく変わってくる。障害を関係性の中で見ていくという明確な視点があれば、「障害は神の恵み」論争もその意味合いが大きく変わってくる。障害観の変遷を理解していないことが、議論を深めない要因になっている。

関係性とは、障害のある人が一緒に生きて楽しいと思える居場所を作っているかが問題となる。教会がそのような教会になっているかが問われている。そのような場所になるときに、その人にとってもすべての人にとっても教会は神の恵みを受けるところとなるのではないか。(注②)

Ⅱ ルカ神学の障害理解

1 ルカ神学の特徴

ルカは医師であり、ギリシャ人であることが知られている。そのことは、彼の著書である「ルカによ

る福音書」や「使徒言行録」の特徴として現れている。

福音書や使徒言行録に示されるルカの特徴を要約すれば、次の三点になる。

①歴史家ルカ

ルカは自分が扱う資料に対し歴史家としての視点を持っていたことは、他の福音書との大きな違いを示している。イエスや原始教会の誕生についての言及が、常に同時期の歴史の中で起こっていることを伝えているからである。

イエス誕生の物語には、福音書の中でその背景を示す歴史的事実が明確に語られている。「皇帝アウグストゥスから…勅令が出た」、「これはキリニウスがシリア州の総督であったとき…」、「皇帝ティベリウスの治世の第十五年目…」等。

また、使徒言行録では、「住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり…」、「ヘロデ王はティルスとシドンの住民にひどく腹を立て…」等、時や場所や主だった地位のある人の叙述に触れている。

これは、ルカが客観的事実をもとに思考する医師としての資質の表れと知られている事柄である。

②文学者ルカ

ルカがパウロや他の新約聖書の著者のように書簡という形式ではなく、物語という文学様式で使信を伝えたのは、物語に示される想像をかき立てる表現が、イエスによって直接語られている雰囲気を読者に与えていて、語り方として臨場的な力強さを与えるからである。それは、イエスとの同時性や即時性を訴えるのに適している。この点は教父ヒエロニムスの時代から、文学者ルカの特徴は知られている事柄である。(注③)

イエスの誕生物語に出てくるザカリアとエリサベトの物語、天使ガブリエルの登場、御子イエスの母マリアへのガブリエルの告知等は、歌劇や映画、音楽で再三取り上げられる印象的な物語である。物語は視覚的・聴覚的に私たちに大きな余韻を持って迫ってくる。パウロの哲学的論理のような直裁的なものではなく、情感に強く訴えることは、物語作者のルカの存在を新訳聖書の中で特別なものにしてしている。

③最下層の人々、困窮者への言及

福音書には、当時のユダヤ人社会の最下層の人々が多く登場する。彼らは病人、障害者、異邦人、徴税人、罪人、貧困者等であり、彼らは社会的排除や偏見の対象者であった。ルカによる福音書や使徒言行録には、このような最下層の人たち、差別や偏見の対象であり、排除されていた人々が他の福音書に比して、多く登場する。それは、医師としての職業的観点もあったであろうが、歴史家として当時のローマ帝国の圧政に苦しむ人々の生活の困窮を、客観的に見てきたこともあるだろう。

他の共観福音書にも、社会の最底辺層の人々が多く取り上げられている。だが、ルカは、苦しむ人々のリストのトップに「貧しい人」を置いている。ルカは何にもまして、普段その不名誉な地位、

すなわち、社会的にも宗教的にも排除されている立場に分類される人々を心に留めている。(注④)

排除されて生きる人々へのルカの目差しは、イエスの生き生きとした語りかけを土台としている。ルカによって、社会の片隅に追いやられている人々に焦点を当てた福音書の使信は、今日のキリスト教のあり方の中心に位置づけられるべきものである。

2 ルカによる福音書、使徒言行録に登場する障害者

(1) 盲人(ルカ 18 章 35～43 節)

「イエスがエリコに近づかれたとき、ある盲人が道ばたに座って物乞いをしていた。群衆が通っていくのを耳にして、『これはいったい何事ですか』と尋ねた。『ナザレのイエスのお通りだ』と知らせると、彼は、『ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください』と叫んだ。先を行く人々が叱りつけて黙らせようとしたが、ますます、『ダビデの子よ、私を憐れんでください』と叫び続けた。イエスは立ち止まって、盲人をそばに連れてくるように命じられた。彼が近づくと、イエスはお尋ねになった。『何をしてほしいのか。』盲人は、『主よ、目が見えるようになることです』と言った。そこで、イエスは言われた。『見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。』盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従った。これを見た民衆は、こぞって神を賛美した。」(注⑤)

この箇所は、マタイによる福音書、マルコによる福音書に並行記事として現れる。マルコでは、盲人の名前が「バルティマイ」と記されている。

この物語は、多くの神学者に取り上げられ、様々な解釈がなされている。一般的な解釈は、弟子たちや群衆と比較して、盲人がイエスを誰であるのかを知っていたことに注目して、多くの人たちは神に対しての正しい理解に欠けることを強調する。それは同時に、「盲であること」を隠喩的に解釈する方向を取ることになる。すなわち、人間は、「悪い習慣」や「間違った事柄」の上に土台を築いていて、そのようなものを放棄することが求められているという理解である。「見えないこと」はその象徴であり、悪しき習慣や誤理解を捨て去ることが求められている、というのである。このように解釈によって、「見えないこと」は人間が捨て去るべき事柄と解釈される。あつてはならない事柄と、「見えないこと」を結果的に同一視する結果になる。

さらに、イエスの語った言葉「あなたの信仰があなたを救った」の理解を、前述の解釈と重ね合わせることにより、「見えないこと」は「罪」の一形態であり、そこからの解放は神への信仰によるという理解に進むことになる。事実、キリスト教会で盲人に対して語られることの一つに、「もしあなたに信仰があれば、教会を一步出た瞬間に目が開かれるだろう」がある。自分の信仰が「見えないこと」から、「見える世界」に変えるという。このような視覚障害者への偏見や、そこから生じた差別・排除の例は、数限りなくある。

アメイジング・グレイスの歌詞に、「私はかつて失われていた。しかし今は見いだされた。かつては目が見えなかった。しかし今は見える」とあるが、盲人の牧師は次のように語る。「私はかつて目が見えなかった。そして今も見えない」と。(注⑥)盲人の目が開かれた聖書の世界とは、現実の世界は違うことを牧師は説教で語る。盲や障害は罪の結果や、罪にある姿ではないことも。

では、この聖書の箇所は何を意味しているのだろうか。

第一は、すでに見える者(分かっている者)の目を開くことである。目の見えない物乞いの盲人は、イエスを「ダビデの子(救い主)」と呼ぶ。彼は群衆が見えていないものを見ている。そして、群衆が見えていないことを明らかにしたのである。盲人の目を開いて今まで見えなかったものが見えるようになったことは、癒やされたこと、すなわち救われたことである。この箇所は、「癒やし」とは、「救い」であることを示している。

第二は、盲人の目が開けられて神をほめたたえた後、群衆がイエスの前にも後ろにも膨れあがって、イエスを救い主と呼んで歓声を上げ、神をほめたたえた、とある。盲人の出来事が起こる前は、群衆は明らかにイエスを「救い主」とは見えていなかったのである。

この記事の後から(20章41節以降)、イエスは「ダビデの子」についての称号を論じている。「救い主」は「ダビデの子」であることを、イエスは明快に答えている。

無知な群衆を救い主に会わせるといふ「神の御業」の重要部分を担った者が、この世ではうち捨てられて、路上で物乞いをしていた盲人であったことは、キリストの使信は障害者に代表される社会的には排除された人々を、決して排除しないことを意味している。

救われた盲人は、イエスに従った。キリストの弟子になり、行動を共にしたとある。

(2) 身体障害者(使徒言行録3章1～10節)

「ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。すると生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日『美しの門』という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、『わたしたちを見なさい』と行った。言った。その男が、何かもらえんと思つて二人を見つめていると、ペトロは言った。『わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエスの名によって立ち上がり、歩きなさい。』そして右手を取つて彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入っていた。民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。彼らは、それが神殿の『美しの門』のそばに座つて施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こつたことに我を忘れるほど驚いた。」(注⑦)

ルカはイエスによる奇跡の理解を二重の意味で受け止めている。第一は、奇跡はイエスの力を

証明し信仰を起こす力を持っていること。第二は、奇跡は信仰に対して与えられることである。だが、奇跡の徴が単なる好奇心から求められる場合には拒絶している。奇跡がなされるためには、信仰が必要であり、同時に奇跡そのものが信仰を呼び起こす手段にもなっている。この傾向は、使徒言行録にも引き継がれているが、使徒言行録では、復活が中心に位置して、他の奇跡は二次的な意味づけになっている。ルカは特にキリスト教の奇跡を、この世の魔術と切り離すことに心がけている。

さて、上述の聖書の箇所が登場する「生まれながらの足の不自由な男」とは、直訳すれば、「母の胎から足の悪かった男」の意であり、胎(κοιλια)はギリシア語の医学用語では「消化器官」に当たりますが、先天的な障害を直裁的に伝えるものとして理解される。

生まれながら足のきかない男は、毎日神殿の「美しの門」のところまで背負われて、そこに投げ出されていた。彼は物乞いとして神殿詣をする人々の憐れみを請うていた。この男が祈りのために神殿に上ろうとするペトロとヨハネを見て、施しを請う。

この男と出会ったペトロたちは、「私たちを見なさい」と言う。ペトロを見ることは、彼が指し示すキリストを見ることである。男は何かもらえるだろうと期待して二人に注目した。ペトロたちは、イエスの名による癒やしを行った。

神学的積義では、「イエスの名による解放」と位置づけられる。すなわち、人間を押さえつけ、虜にする様々な要因の名前は、人間が主体的に生きることを拒む障害要因であり、そのような諸々のしがらみから解放して、人間を神に向けさせた事柄として捉える。「生まれつきの足の障害」は、神に向かうべき人間の目を、地上の不幸の虜にしているものという理解である。「盲」と同様に、神への道を障害する要因として、肢体不自由は理解されている。

この癒やされた男は、真直ぐに仲間のもとに帰ったのではなく、二人と一緒に神殿に上がり、そこで神への感謝と賛美をした。

聖書には後日談がある。ペトロは神殿で説教をする。その内容は、ユダヤ民族が長く待ち望んだメシア(救い主)はイエスであり、彼こそ民族を救済するものだと語った。それを聞いたユダヤ社会の支配者たちが、ペトロとヨハネを捕らえて、議会で取り調べを行った。ペトロは、イエス以外の誰によっても救いが得られないことを説いた。支配者たちは、ペトロと一緒にいる人が、かつて自分たちが見ていた足の不自由な者であり、イエスの名によって癒やされたのを見て、一言も言い返さなかった。彼がペトロたちを窮地から救い出したのである。かつての肢体不自由者は、癒やされて人々の前で「イエスの証人」となっている。

この物語でルカは、神殿の傍らでうち捨てられていた肢体不自由者を、イエスの証人として立てられ、ペトロの宣教の前進に貢献した者として描いている。盲人と同様、神はこの世の有力者、支配者、知恵者ではなく、富も知恵も身体の健康も失われた者を用いる。

「家を建てたる者の退けた石が、隅の親石となった。これは主の御業、私たちの目には驚くべき

こと」(詩 118 篇 22,23 節)

この場面は、復活信仰に固く立つルカのイエスの再臨に直結している。ルカにとってイエスは、死者から復活した救い主であり、裁きの主として地上に再臨することの確信があった。

足のきかない男が、救われて神殿の中を歩き回り、主を賛美する姿を見た人々は、「驚き怪しんだ」と記している。だが、これは救い主の再臨の預言である。(注⑧)

その時、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。

その時、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。

口の利けなかった人が喜び歌う (イザヤ書 35 章 5,6 節)

(3) 精神障害者(ルカ 8 章 26 ~ 39 節)

「一行は、ガリラヤの向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが陸に上がられると、この町の者で、悪霊に取りつかれている男がやって来た。この男は長い間、衣服を身につけず、家に住まないで墓場を住まいとしていた。イエスを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で言った。『いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。』イエスが、汚れた霊に男から出るように命じられたからである。この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので、鎖につながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた。イエスが『名を何というか』とお尋ねになると、『レギオン』と言った。たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである。そして悪霊どもは、底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。ところで、その辺りの山で、たくさんの豚の群れがえさをあさっていた。悪霊どもが豚の中に入る許しを願うと、イエスはお許しになった。悪霊どもはその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、おぼれ死んだ。この出来事を見た豚飼いたちは逃げだし、町や村にこのことを知らせた。そこで、人々はその出来事を見ようとやって来た。彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出してもらった人が、服を着、正気になってイエスの足もとに座っているのを見て、恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。そこでゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたい、イエスに願った。彼らはすっかり恐れに取りつかれていたのである。そこでイエスは舟に乗って帰ろうとされた。悪霊どもを追い出してもらった人が、お供をしたいときりに願ったが、イエスはこう言ってお帰しになった。『自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになされたことをことごとく話して聞かせなさい。』その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。」(注⑨)

この物語には当時のヘレニズム時代の悪魔払いに共通する要素が多く見られる。①悪霊との

出会い, ②悪霊に憑かれた男の危険な兆候, ③呪術者に対する悪霊の防御, ④呪術, ⑤悪霊が退去する様子, ⑥治療, ⑦見た人々の反応, である。(注⑩)

当時の精神障害者の置かれている悲惨な状況が記されている。彼は、町や家から強制的に隔離され、墓場を住まいとせざるを得ない状況に追い込まれている。墓場から町に戻ろうとしても取り押さえられて、墓場に放置されることが何度もあったと推測される。何らかの事件を起こして、鎖や足枷に縛られるようになったのだろう。「悪霊に憑かれた者」は、「穢れた者」として宗教的・社会的差別の対象となっていた。

イエスが何者かの噂は、彼の耳に届いていたのであろう。彼にとって、イエスは最後の希望であったに違いない。そのイエスが近づいてきた。遠くから見つけると、一目散に駆けてきて、大声で叫んだ。彼の懸命さが伝わってくる。病気の故に、隔離され、差別され、排除され、人間として見てもらえない悲惨な状態から抜け出したいという強い思いがほどばしている。閉じ込められた墓場から抜け出し、衆人の目に晒されることも厭わない彼の窮状を知る。

彼の中の悪霊が大声で叫ぶ。「神の子よ、私たちにかまわないでくれ」と。イエスは悪霊に向かって、「汚れた霊、この人から出て行け」と一喝すると、悪霊は豚の中に乗り移り、豚の群れは暴走して湖になだれ込んでおぼれ死んだ。

豚の群れから見えることは、「ゲラサ地方」とはガリラヤ湖の東南 60 km に位置する異邦人の町であった。ユダヤ人には豚を飼う習慣はない。異邦人、すなわち、ユダヤ人ではないことは、ユダヤ教徒彼らから見れば、「穢れた人々」であった。「穢れた人」の中の「悪霊に憑かれた人」は、二重の意味で、ユダヤ人から見れば排除の対象である。

この悪霊の名が、「レギオン」と呼ばれていた。「レギオン」は当時のローマ帝国の軍団の正式名称である。1レギオンは 6,000 人の重装備兵士の軍団である。男に取り憑いた悪霊が「レギオン」という名称であったことは、当時のユダヤ人社会の「反ローマ帝国」の風潮を示しているだけでなく、イエスがレギオンを追放したことは、ローマ帝国の追放も意図していた。ローマ帝国の植民地であるユダヤ人には、横暴な支配者に対して強い反発があった。

「悪霊憑き」と「権力的抑圧」、「植民地支配」は、密接な関係にあると滝沢は述べる。この悪霊憑きの男は、少なくとも「レギオン」や「ローマ帝国に関わる戦争」に何らかの関わりのある人物と想定される。そのような体験が彼を重度の精神障害にした原因であるのかもしれない。いつしか、彼に取り憑いた悪霊を「レギオン」と呼ぶようになったと考えられる。(注⑪)

民衆のこうした反ローマ帝国の思いが、異邦人の象徴である「豚」に結びついたのだろう。豚はユダヤ人にとって最も不浄の動物であった。

この物語の結末は、悪霊から解放された男がイエスに従って行きたいとの申し出を受けて、イエスは彼を自分の住む町に帰らせ、イエスの癒やしを地方全体に言い広めたのである。

上述の二例、盲人と肢体不自由者は癒やされた後、イエス(ペトロ)の弟子として宣教の役割を果たすことになるが、この物語は、癒やされた後に、隔離されていた場所から、元いた場所への

復帰がポイントになっている。ゲラサのあるデカポリス地方で、イエスの宣教を担ったのは、「弟子たち」ではなく、かつては社会全体から排除されて墓場に住むしかなかった重度の精神障害者の男であった。イエスはこのような人を選び、神の御業のために用いたのである。

「自分の家に帰りなさい」というイエスの言葉は、社会から隔離され、うち捨てられた墓から、家への帰還、社会共同体への復帰を意味している。孤独、孤立、無支援の人が、人間へと回復していく。この物語は、インクルージョンそのものである。インクルージョンの示すことは、場への復帰だけでなく、関係性への復帰でもある。この物語は、イエスの癒やしの行き着くところは、人間性の回復、人間になることであることを示している。

(4) 重い皮膚病に冒された人(ルカ 17 章 11 ~ 19 節)

「イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて『イエス様、先生、私たちが憐れんでください』と言った。イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、『祭司たちのところへ行って、体を見せなさい。』と言われた。彼らはそこへ行く途中で清くされた。その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。そこで、イエスは言われた。『清くされたのは十人ではなかったのか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。』それから、イエスはその人に言われた。『立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』」(注⑫)

最初に指摘おかなければならないことは、「重い皮膚病」と訳されているものは、ヘブライ語の「ツァーラート」、ギリシャ語の「レブラ」であり、かつては「ライ病」と翻訳されていた。1997年「らい予防法」が撤廃されたのを受けて、聖書の文言も「重い皮膚病」に書き換えられた。

ヘブライ語の「ツァーラート」は特定の病気というより、むしろ宗教的祭儀的な「穢れ」の観念に基づく皮膚疾患の総称である。衣服や家屋の「かび」や「しみ」もその名称で呼ばれていた。しかも、ハンセン病がパレスチナに入ってきたのは、紀元前4世紀のことであり、考古学的には、「ツァーラート」は「ハンセン病」と同一ではない。ギリシャ語の「レブラ」も基本的に「ツァーラート」に対応するものであり、ハンセン病と断定することは難しい。学者の中でも、ハンセン病に係る差別的な事象からの脱却のために名称変更したことに抵抗感を持つ人も多い。「重い皮膚病」としたことでは、本来の宗教的な穢れの意味が見えてこないからである。(注⑬)

だが、この問題はハンセン病へのとてつもない歴史的差別の実証が、聖書の記述を変更させる要因となった。ここではハンセン病との関係に触れておくに留めたい。

旧約聖書には、次のように記されている。

「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほだき、口ひげを覆い、『わたしは汚れた者です。汚れた者です』と呼ばわらなければならない。この症状がある限り、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。」(レビ記 13 章 45,46 節)

この病気は、神の怒り、神の罰としてもたらされたものであると、民数記に記されている。

「ミリアムは重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。…アロンはモーセに言った。『わが主よ、どうか、私たちが愚かにも犯した罪の罰を私たちに負わせないでください』。…」(民数記 12 章 9～13 節)

一方で、ツァーラートは不治の病ではなく、治療したものに対して「清めの儀式」がお行われていた。清めの儀式を祭司が行うことは、この病そのものが神の罰とされていたからである。さらに「タルムード(律法の釈義書)」の中で、ツァーラート患者に対して接近して良い距離(風のある場合は 45 メートル、風のない場合は 1.8 メートル)と規定されていた。

それ故、ツァーラート患者は人々とは離れて暮らしていて、自分たちのコロニー(居留地)を形成していた。社会的にも宗教的にも排除されたグループとしての存在であった。

この物語の意味するところは次の二点である。

一点目は、「癒やし」は「救い」と同義であることである。19 章に登場する徴税人ザアカイの物語は、イエスが社会的に侮蔑の対象となっている徴税人の家に泊まるという記事である。失われた者を求め、「救う」ためにイエスはこのザアカイのところに来たのである。ここで使われている〈σωτηρια〉は、「癒やし」とも訳される言葉である。この物語は、癒やされた 10 人と救われた一人の物語である。

二点目は、信仰によって救いを得た者は、二重に排除されている外国人ということである。ルカは、社会から阻害されている人々を重点的に取り上げる。それはルカの顕著な傾向性である。

サマリヤ人は、かつて北イスラエル王国が滅び、他民族の支配を受けた時代に、人種的宗教的混交によって、民族や宗教の純潔が失われた人々である。聖書には、このサマリヤ人の土地を通ることを拒否して、何日もかけて遠回りするユダヤ人が描かれている。彼らは、ユダヤ人からすれば、社会的な爪弾き者であり、宗教的な異端者であった。さらに、彼はツァーラート患者であった。

だが、ここで注目すべきは、ツァーラートを患っている人々のコロニーでは、ツァーラートという重い課題を担う彼らには、ユダヤ人か異邦人かの問題は大した問題ではなくなっていたのである。障害が彼らを包括(インクルード)した集団にさせていたのである。

さらにこの物語は、この後起こる使徒言行録の先取りとして登場している。それは、イスラエルの中で、真実を見ない傾向が増大する一方、異邦人の間で受け入れられていくということであ

る。

この物語には、明らかにそれを反映させる先行記事があり、ルカはその記事を熟知していたと思われる。それは列王記に示されるナアマンの記事である。

アラム王の司令官ナアマンは、重いツァーラートに罹っていた。イスラエルとの戦いの中で捕虜として連れてきた少女が、サマリヤの預言者に行けば、病は癒やされると言う。そこでナアマンは、その地へ赴き、預言者エリシャに会うと、「ヨルダン川の水で七度体を洗いなさい」と告げられる。実行するとツァーラートは癒やされた。(列王記下 5 章 1～18 節)

ツァーラートから救い出した神は、本来敵であり、救いの対象ではない異邦人に救いと信仰を与えた。この記事が、ルカにとって念頭にあったのであろう。ルカは、イエスの物語を、旧約聖書の様々な物語の類型に沿って著述することを好んでいる。異邦人の改宗が、この物語の主題となっている。(注⑭)

Ⅲ まとめ

1 聖書の障害理解

福音書と使徒言行録に現れる障害者の癒やしを通して、聖書は何を私たちに伝えているのか。イエーネは次のように要約している。

- (1) 障害者に関する特殊な人間学は存在しない。障害において、普遍的な人間存在の症候が明らかになる。
- (2) イエスの救済は、同一のあり方、同一条件で障害者と非障害者に贈られている。
- (3) 障害者と非障害者の共同社会の共同性を構築するのは、救済への同一関与である。
- (4) 救済は癒やしの関連にある。
- (5) イエスとの交わりは、障害者との包括的な共同体を作り上げる。(注⑮)

福音書は、イエスの言葉と業、特にその死と復活を通して、神の国の実現が迫っていることを伝えている。私たちの目を障害者に向けさせたのはイエス自身であるが、障害者が他の人々と一緒にイエスと出会っていることを示している。

イエーネは、障害者と非障害者、罪人と義人、貧者と富める者の区別はなく、彼らに向かってイエスは同じ言葉をかけることに注目する。それは終わりの時に、「自分たちは神の前に貧しい者であり、何も持たない者であること」に気づいて、神の国にあずかることを待ち望むものになることであるという。障害があろうがなかろうが、貧しかろうが豊かであろうが、神への服従を要求されている人間として同じであることを強調する。

イエーネの主張は、イエスによって障害者を包み込む共同体を形成することである。障害者は、社会の中で疎まれ、排斥されやすい人々であるが、イエスによる救いの一点で、人々は等しく共同

体を形成するのである。イエーネの主張は、聖書の示す使信が、「インクルーシブな共同体」の根拠であることにある。

しかし、問題なのは、キリスト教の歴史の中で、また現実存在する教会がそのような共同体として形成されてきたかである。

2 障害と自然神学論争

かつてプロテスタント神学論争として、「神の像論争」があった。神は人を造られたとき、「神はご自分にかたどって人を創造された(創世記 1 章 27 節)」とある。この神の像とは何かをめぐる論争である。有名なバルトVSブルンナー論争としてよく知られている。ブルンナーは人間の墮罪にもかかわらず、動物と異なるのは「言語能力」であるとして、そこに「神の像」を見ようとした。バルトは人間の側に「神の像」はなく、神からの呼びかけ、問いに応じていく「応答責任性」だと主張した。

バルトは、神の像の根拠を人間の持つ「言語能力」であることに対して、それを自然神学と批判した。墮落した人間の側からは、神に至る道は存在しない。神の側から人間を語るバルトからすれば、ブルンナーは自然神学の残滓を残していると考えられた。

だが、私はこう思う。人間と動物を分けるものは「言語」だと主張する人たちがいる。では、言語を持たない障害者は人間ではないのだろうか。否、正確には自分の意思を言語化できない人たちは、人間ではないのか。また、人は言葉で「イエスを救い主」と告白して、救われるという。言葉で告白できない人たちに信仰はないのか。

私は障害児教育の専門家として、「言葉」の意味を正確に規定する必要があると考える。

他者の言語を理解する「理解言語」と、自分の意思を他者に伝える「表出言語」である。

人は表出言語はなくても、思いを表出したい意思をすべての人は持っている。それをうまく出せない人たちの問題は、当事者の問題ではなく、聞き取ろうとする周囲の者の問題である。今日の障害児教育の到達点はそこにある。

その点を踏まえて言えば、「言語で信仰告白する」とは、本来的には、「意思で信仰告白する」と言い換えるべきである。なぜなら言語に限定されてはならない様々な人間の状況があるからだ。キリスト教の歴史の中で、「表出言語能力」のない人たちが、教会から排除されていた事実がある。そこには、知的障害者だけでなく、聴覚障害者も含まれていた。それは、人の持つ言語能力に対する一方的な理解や過信のためであったと言わざるを得ない。今日でも、その点から教会への扉が閉ざされている人々は多く存在している。

自然神学論争の「言語能力」も「応答責任性」も、障害者抜きに神学観・人間観に立っている。

3 私の障害観と神学

神は人間を創造された。バルトによればこのことは二つのことを意味している。

一つは、人間の創造とは、創造主である神に責任を負う存在としてつくられたことである。それ

は神の契約相手として創造され、神への応答が求められていることである。二つは、神との契約関係に生きることは、他の人間との関係も出会いにおける存在として責任を負うものということである。このように人間の持つ人間性は、本性的に連帯的人間性であることという結論になる。

創世記2章18節の「人が一人であることは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」の助ける者とは、「彼に差し向かう者である助け手を造ろう」の意であり、この「差し向かい」こそが、「神の似姿」なのだとバルトは言う。

単なる助け手ではなく、向かい合う存在であるという。この神に差し向かって造られた者は、同時に隣人として造られた女とも差し向かう存在である。男と女の創造は、ただ単に異性として支え合うことを意味しているだけでない。隣人に向かい合う者として造られた人間は、他者を肯定し、他者を励ます存在なのだ。(16)

今日の「共生的人間」とは、お互いが理解し合い、助け合い、支え合う人間存在を示している。だが、キリスト教では、単に助け合う存在ではなく、お互いが差し向かう存在であるといわれる。人間的な地平での支え合いではなく、神との差し向かう存在がその前に置かれている。この垂直的な関係性が、人間社会の「共生的人間像」に深くさびを打ち込んでいく。

さらに、人間は孤独な存在ではない。神の契約相手としての人間は、神の呼びかけに応答する者として造られている。同時に隣人に対して、応答を求められているものである。神は人を求められる。人はその求めに応ずるように、予め造られている。人は一人の人間として生まれてきたのではない。二人で一人の人間として生まれてきたのだ。

私は障害者との関わりの中でこのことを身をもって学んだが、二つの事例を挙げよう。

〈二人で一人の人間〉

自閉症の男性は、今から26年前に洗礼を受けて信徒になった。養護学校高等部を卒業後に通所の作業所に自宅から通い、日曜日に礼拝にやってくる。重度の知的障害があり、神奈川県では4段階の療育手帳(障害手帳)の中で最重度の「A-1」判定である。こちらの指示はある程度理解できるが、自分から話すことはない。自閉症特有のこだわりや独語があり、コミュニケーションの障害があって、自分から関わろうとすることはない。

読字能力がないので、聖書を読んだり賛美歌を歌うことができない。ところがある日、賛美歌の歌詞の一節を教えると正確に声に出して歌えることが分かった。短期記憶力は自閉症の優れた特長の一つである。そこで礼拝で歌う賛美歌では、歌詞を前もって一節ずつ教えて歌うようにさせた。音階は全く取れないので、奇妙な歌声ではあるが、これが彼の賛美歌であることを私たちは知った。

だが、賛美歌を大きな声で歌いたいという私の思いは、彼に歌詞を教えることで実現することがなくなった。これは随分欲求不満であった。しかし、その時、人間の創造の秘儀を知らされたの

だ。神は二人で一人の人間をお造りになったのだと。私は読み手として、彼は歌い手として、正しく二人で一人の役割をしている。神の人間の創造の意味をこのとき明確に知らされたのだ。助け合い支え合う人間、それこそが神の創造の意図なのだ。

彼と二人で賛美歌を歌う。時には彼の呼吸や鼓動を感じながら、時には歌っている彼の唾液がかかることもある。ときどき私を見てニヤッと笑うこともある。目を合わせない自閉症の彼が、私の心と一つになる瞬間である。神は確かに二人で一人の人間をお造りになったのだ。

〈差し向かいで生きる人間〉

重度障害者との関わりの中からこのことを学んだ。私は障害児教育に長く関わったが、知的に軽度の子どものための指導が中心であった。新設校の校長として赴任したとき、教育委員会にいた当時の同僚から、校長になったら最重度の子どもたちをいつも心にかけて欲しいと言われた。それは重度の子どもたちに関心を向けることで、教員も保護者も校長の姿勢に安心感を得られるからだという。私は毎朝、新設校の医療的ケアを必要とする重度の肢体不自由の子どもたちの教室に通った。

最重度と言われる子どもたちの中には、身体能力でもコミュニケーション能力でも他者と関係を取ることの困難な子どもたちがいた。だが、担任は言葉のない子どもたちのわずかな動き、顔の表情や時々上げる声の様子から、その子が何を望み、何を訴えているかを読み取っていく。ほとんど寝たきり状態で、サインと言えるものは何もないその状況で、意思を読み取るのだ。教師たちはその子の目をじっと見つめて、様々な声かけをする。それに対する反応を正確に読み切っていく。それはプロの技術であった。私は何年もこの子たちと関わり、何を言わんとしているのかを読み取ろうとした。何回かはこれだと思えるものもあったが、プロの技を身につけるまでに至らないで退職するに至った。

言葉も動きもない子どもたちとコミュニケーションを取る秘訣は、じっと目を合わせること、言葉がけを必ず聞いている、分かっていると確信を持って行うこと、できるようになることを信じること、それが差し向かうことであることを知った。それは相手の存在の奥底まで迫ることである。言葉やジェスチャー、サインによる意思表示のできない子どもたちの意志は何かを読み取ることは、相手と顔と顔を合わせ、目を見つめて息づかいや心臓の鼓動を聞きながら、うめきや喃語の発声や小さな表情の変化、わずかな身体の動きが何を意味するかを模索することである。

教育では教師が子どもと向かい合うことの大切さが語られる。家庭では親子の向かい合いが勧められる。真正面から向き合うことで人と人との関係が生まれる。だが、この障害のある子どもと向き合うことは、ただの向き合いではない。言葉やサインという意思伝達の手段のない子どもたちには、相手の心の中に差し入れていくことで初めて伝わってくるものがある。

「Gegenüber」を「差し向かい」と訳すが、相手に真正面から心に切り込んでいくのが、「差し向かい」である。沈黙の相手、何を求めているかが良く理解できない相手に対して、相手の心

の奥底に差し込んでその意図を探る。それが「差し向かい」なのだ。神は何を求めておられるのか、神の御心を探ることが、差し向かうことである。私たち人間の神への応答は「責任応答性 (Verantwortlichkeit)」であり、相手の呼びかけに全責任を持って応えていくことの意である。これは創られた者が、お造りになった方の呼びかけに対する態度である。

私は、表出手段のない重度障害児の声を聞き続けることが、「差し向かい」であり、「責任応答性」であることを学んだ。

4. インクルージョンとは何か

インクルージョンとは、どのような違いであれ、それを理由として排除するのではなく、お互いが受け入れ合い支え合って生きる共生の理念である。北欧の福祉哲学から生まれた「排除しない社会の理念」は、多くの国や機関が賛同し推奨している。

元々は高齢者の問題から出発した共生の理念は、福祉分野に留まらず教育においても、また社会のあり方についても目指すべき世界の潮流となりつつある。日本では教育問題として障害児と健常児の分離した教育を一体化した取組として知られているが、社会的排除に関わるすべての事象でこの理念が優先すべきものとなる。

日本では最初に福祉分野でインクルージョンが取り上げられた。神奈川県福祉部では、30年ほど前に今後の福祉のあり方の中心としてインクルージョンが紹介された。だが、今日に至るまで障害児教育の課題としてインクルージョンが取り上げられることが多かった。それは長く障害児教育の分野では、障害のある子どもと健常の子どもとの教育のあり方を巡って、統合教育(インテグレーション)が大きな議論となっていたからである。

統合教育は、障害のある子どもたちを通常の学校に入れることによって、差別のない教育環境を実現することを目指した運動論であった。端的に言えば、ある種のイデオロギーであり、絶対の正義がそこに存在すると考えられていた。そのため、運動家たちは強く自説を主張した。そこでは場や時間の統合が強調され、健常の子どもたちと異なる場所や教育内容は差別であると断定された。それは障害者への差別や排除への怒りから始まったものであった。

このような統合教育の運動に対して、インクルージョン(包み込み)は、そもそも人を障害と健常に二分できるのかという人間観から出発している。これは障害者の側からの統合教育とは別に、教育や福祉の根底にある人間哲学から始まっている。

インクルージョンの意味するところをまとめると次のようになる。

インクルージョンとは、様々なニーズのある人々を包み込み、支えあう社会のあり方を指すものである。教育におけるインクルーシブ教育は、社会的インクルージョンの一面である。民族、言語、宗教、性別、障害などの理由で排除(イクスクルージョン)するのではなく、子どもの個別ニーズに合わせた愛情豊かな教育を目指し、一人ひとりの違いを祝福し歓迎する価値観に基

づいている。

ソーシャルインクルージョンの視点からは、「排除」「差別」「偏見」と見られ従来の「排除事象」への反省を基に、共に支え合う共生社会づくりを実践する理念となる。

インクルージョンは包み込み、一体化と訳されるが、反対概念の「Exclusion」を見れば意味するところが明らかになる。すなわち、「排除しないこと」である。

教育の分野では、障害など様々なニーズがあろうとも、弾き出さずに一緒にやっていくことを目指すことである。

社会全体のことで言えば、障害者、高齢者、外国人、ホームレス、貧困家庭、犯罪者などを壁を作って外に追い出すのではなく、お互いが理解し合い助け合うことを目指すことである。

障害について言えば、インクルーシブな社会の到来と共に、障害、障害者の言葉そのものなくなる社会と言われる。障害者を特別視するのではなく、自然に支え合う意識や仕組みが出来上がっていて、特別な対応を必要としない社会になる。

そもそもインクルーシブな社会では、障害者と健常者という境界線は引けず、障害は健常とは明確に区別されない。人はすべて障害者という認識がそこにある。

教育界では日本の文部科学省から2012年7月に、「共生社会に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」の報告書が出され、今後の教育のあり方が示されている。

教育や福祉の特別の領域のことでなく、社会全体が境界線や枠を作ってそこから弾き出すことをやめることが求められている。教育や学校をキリスト教や教会に置きかえてみれば良い。初期のキリスト教は聖書に基づいて、苦しむ人々を積極的に迎え入れ、教会を形成してきた。インクルージョンの理念とは、そもそもキリストの言動やそれを記した聖書の中に明白に示されている。

ルカ神学における障害者の記事は、イエスは障害者、病人、異邦人、貧しき者など、社会的排除の対象者と常に一緒にであったこと、彼らを福音の対象と当然のように考えられていたこと、むしろ持たざる者こそが神の国の福音にふさわしいという、地上の価値観の逆転がそこにあることが示されている。

障害者の癒やしは、神の国の実現の先取りであり、宣教の道を整えさせたことは、路上にうち捨てられ、物乞いをしていた障害者であり、共同社会から排除されてコロニーに住む障害者であった。救い主が誰かをはっきりと知っていて、晴眼者にそれを伝えたのは目の見えない盲人であった。

聖書に示されている障害者は、今日でいう「インクルード」された人々であった。イエスの物語、使徒言行録の物語は、インクルーシブ社会の原型、インクルージョンの理念に満ちている。

私はインクルージョン思想は本来は聖書に根ざしたものであり、キリスト教の歴史や教会の中で実践されてきたと考えている。だが、同時に「イクスクリージョン(排除)」もまた、キリスト教や教会の大きな伝統であったといわざるを得ないと思っている。

インクルージョンの視座から、もう一度キリスト教や教会のあり方を探ってみることが、今こそ必要ではないのか。それは、「排除」と「非寛容」が現在の社会のあり方を象徴する時代となってきたからである。

キリスト教は、その初めから排他的な宗教ではなかった。だから、「愛の宗教」と呼ばれた。もう一度、この観点から聖書を読み、教会形成を考えるべきではないのか。

〈注〉

- ①「障害者神学の確立をめざして」NCC障害者と教会問題委員会編 1993年P.20～37
- ②「ホームレス障害者」鈴木文治 日本評論社 2013年P.123
- ③「ルカによる福音書」F. B. クラドック 日本キリスト教出版 P. 26
- ④「ルカ福音書の神学」グリーン 新教出版2012年 P.95
- ⑤「聖書 新共同訳」日本聖書協会 2007 P. 26
- ⑥「癒やしの説教」K. ブラック 教文館P.81
- ⑦「聖書 新共同訳」日本聖書協会 2007 P. 216
- ⑧「説教者のための聖書講解」四竈揚 日本基督教団出版局1990年 P.48
- ⑨「聖書 新共同訳」日本聖書協会 2007 P. 119
- ⑩「イエスの現場」滝澤武人 世界思想社2006年P.101
- ⑪「イエス・キリスト下」荒井献 講談社2001年 P.276
- ⑫「聖書 新共同訳」日本聖書協会 2007 P. 142
- ⑬「イエスの現場」滝澤武人 世界思想社2006年P.85
- ⑭「ルカによる福音書」F. B. クラドック 日本キリスト教出版 P. 337
- ⑮「共感福音書と使徒言行録の中の障害者」H. イェーネ 新教出版社
- ⑯「キリスト教倫理Ⅱ」バルト 新教出版 1984年 P.10,11